

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(41)〉

学内シンポジウム

「保育現場と協働して学生を育てる」を振り返って(1)

佐治由美子

二〇〇九年九月二十五日、お茶の水女子大学（以下、お茶大）幼保プロジェクトでは、同年五月の保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み^{注1}」の続編として、学内公開シンポジウム「保育現場と協働して学生を育てる」総合的保育者養成を考える」を開催しました。

今回の趣旨は、実習や観察による現場での学びによって大きく成長する学生たちを、現場と大学が協働してさらに支え育てていくことを目指して、それぞれの現場の方々と大学とで保育者養成のイメージを共有

する機会をもつということでした。

討論者としては、前回のシンポジウムで話題提供をされた保育現場の方々四名に加え、幼保プロジェクトのメンバー五名^{注2}が一つのテーブルを囲む、いわゆるラウンドテーブルの形式で話を進めていきました。

当日は、初めに幼保プロジェクト・リーダーの浜口順子がお茶大の保育者養成の特質について触れ、そこに保育の現場がどのようにかかわってきたかについているのか、大学と現場とで養成のイメージを共有しておくか、と投げかけました。それに対して、現場の方々

が、それぞれに異なる質の保育の場にあるにもかかわらず、総合的保育者養成のイメージを共に探りつつ話を展開してくださいました。また、このテーブルを大きく囲んでくださった参加者の方々からも提言への感想を出していただきました。

以下、シンポジウムの実際の様子を前半と後半に分け、今回はその前半部分をお伝えしていきます。

現場の方々から

話題提供者の所属は、次のとおりです。

- ・板野昌儀 「愛育養護学校（以下、愛育）」
- ・私市和子 「お茶大附属いずみナーサリー」
- （以下、ナーサリー）
- ・高橋陽子 「お茶大附属幼稚園」
- ・佐藤キミ男 「障がい児放課後クラブはすねっこ」

（以下、はすねっこ）

板野 学生さんが現場に入って感じ取ることはいろい

ろあると思います。私自身が実習生の立場から始めて三十年たちましたが、自分にとっては変わることよりも、むしろとどまることだったような気がしています。

愛育ではとんでもないことが日々起こるし、学生さんが戸惑うのもよくわかります。子どもと過ごす時間が積み重なっていけば戸惑いも少なくなっていくのでしょうが、その場での対応を先に頭で考えてしまうと戸惑いは無くならないのだと思う。その時にいろいろな人に助けってもらったことが後々につながっていくわけだけれど、そのような人との間の経験の無さ、そして子どもにかかわっていくことそのもの、またそれを言葉にする難しさというのがある。子どもについて語る自分が自分を語るようになっていく、それに気づくのがまた難しい。そういうことを私自身が繰り返してきたので、学生さんの話を聞いていて何ら違和感が無い。どの人も結局、現場での体験がいったいどうい

ことなのか、という問いに向かつて進んでいるような気がします。そこにいままも変わらないおもしろさを感じる。こちらの予想を超えるような発想が学生さんから出てくるなら、それはなおうれしいことだと思っています。

学生さんの変化ということ言えば、ますますかわりづらくなっているような気がする。私自身が不器用だからよくわかる。学生さんが自分の器用さを発揮できるならば、それは子どもにも喜ばれるのでいいことではあるけれど、不器用な場合には子どもに思いが伝わらなかつたりして、互いに何とか相手を理解しようということになつたりする。やりとりが成立したことを子どものほうがうれしく思ってくれて、そこで子どもとの関係が成り立つ、ということもある。そのような、関係の中にある難しさ、特にうまくいかない時に子どものそばで感じていることは、そう簡単には言葉にならない。学生さんにとってそのような体験から

得たものが、やがていろいろな人にかかわる場に出ていった時に、おそらく力となつて現れていくだろうと思う。そのような意味で、保育者になつてもならなくても、保育の原点のようなものを実習の中で経験していつてくれたら、と思います。

私市 ○一歳の子どもも、声は発するが、まだ言葉としてはしゃべらない。だから私たちは、そういうところから子どもの気持ちをくみ取らなくてはいいかない。

今年度の学生さんに前期の始まりと終わりとを比べて自分自身がどう変化したと思うか、聞いてみました。ある学生さんによると、初めのころは、自分でもどうしたらいいのかわからないし、内心慌てていたことを赤ちゃんはわかつていたのではないかと思う。前期が終わるころには子どもとの信頼関係ができてきて、この子はこうしてほしいのかなと少しわかるようになってきた、ということでした。

新しく来た子で、いつもは泣いているけれどナーサーリーにいた大人に順番をつけている子がいて、一番、二番は担任。その担任の向こう側について、そこから周囲を見ている。でも、人にはすぐ興味があり、そばに来た人に対しては、あっ、あっと反応する。その子の三番目くらいになりたくて声をかけるとニコツと笑うけれど、すぐに担任の肩をギュッとつかむ。その姿を見ると、その担任と一緒にいるのが心地よいのだから、ということを感じる。

こうして三番目になることができた実習生は、子どもに何かをしたからというのではなく、その場において気持ち共有する人であったから子どもが安心できたのだらうと思う。信頼関係を急いでつくるのではなく、相手に対して待ちながら少しずつ気づいていくことが大事なのかな、と思いました。

高橋 保育者になりたてのころ、わかっているような気になっている自分がいた。その次の時期が、これで

いいのだろうか、本当に子どものことをわかっているのだろうか、その壁にぶち当たってからずっときていて……。子どものことは本当に難しい。でも、子どもの目の前にいるのだから、何かサインを出しているのであれば返してあげなければと思う。だけど、そうしている自分も、もしかしたらその子にとって迷惑なのかもしれないと思う。

ある子に追っかけ回され、近づくパンチをさされたりして、「何が何だかわからなくなっちゃいました」と素直に語る学生さんに出会った時に、よくわからないながらも子どもを感じようとしていたその姿勢をうれしく受け止めている私がついて、長い年月をかけて子どもに出会ってきている自分のほうがよわい鈍いような硬いものを身に着けてしまっているような気がする。ことがある……。こんなふうにして、新鮮な空気を時どき学生さんからももらいながら過あごしています。

佐藤 今日も小学校一年生から中学三年生まで来てい

て、年齢の幅もあり障がいもある、そんな子どもたちの集まる場となっている。子どもたちがどれほど自分を子どもだと思っているのか、それがわからない中がかかわっているような気がする。でも、こちらはどこかで子どもを大人の目線で見ているところがあると思うし、言葉遣いには気をつけながら日々かかわっている。子どもたちが自分をものように感じながら生きていくのか、そのところを意識に入れながら過ごしたと、いつも思っています。

子どもとのかかわりに一つの答えがあるわけではない。また、「はすねっこ」の場合は来る子もその日その日違うし、自分たちもその日の生活がどのようにつくられていくのか手探りの状態で始まっていく。学生さんは午後からなので、いくらか流れができつつあるところに加わってもらうことにはなるが、そこからの生活は子どもと一緒に手探りでつくっていくつもり、そんな感じに入ってもらっています。

フロアからの感想

学生 A (学部三年) 今年から公立の幼稚園にインターンシップの実習で行っています。今日は現場の先生方のお話を聞けて、すごくおもしろかったし、とても安心しました。自分は成長していないかもしれない、とか、不器用でいいんじゃないか、という言葉を開けて、よかったあ、と思いました。

学生 B (院生 M1) 私は学部の三年次から、公立の幼稚園で観察とインターンシップの両方の実習を続けてきました。子どもと、じかに触れている時と、子どもを観察している時とはまったく違う。いまは、毎日幼稚園で過ごすようになり、これまでの観察の経験が大きかったような感じがしています。

学生 C (学部四年) 観察の授業では、(かかわれないので)子どもに対して引いた気持ちになるけれど、教育実習の初日に組まれている観察は、翌日からかかわ

ることを前提としているので気持ちが違う。観察の授業でも、もっと積極的な気持ちもてたらいいかもしれないと思います。

菊地 佐藤さんが、子どもと一緒に手探りでつくっていくという話をされた。いま学生さんが話してくれたことも、手探りなんだろうと思う。実習の初めに戸惑うというのはどの人にもいろいろにあつて、たとえば子どもに声をかけたら拒絶されたとか……自分では最初だから手探りなんだと思っていたのに、そのままずっと手探りだったりとか……。最初のところで観察的な手探り的な保育になるのは、「はずねっこ」でも愛育でも同じなのかな、と思つて聞いていました。

塩崎 最初に教えることがあるのではなく、ぱつと思いついたりしながら保育が始まっていく。子どもと一緒にドキドキしたり、ワクワクしたりするところに保育の専門性がある。小学校の実習では、一緒にワクワクするだけでなく、子どもに教えていくことが必要。

それも、子どもとの信頼関係があつた上での指導法のだろう。学生さん一人ひとりにどちらの実習が合っているのか一緒に見ていく必要がここにある。総合的であるということがキーワードなのかな、と思つて聞いていました。

——次号へ続く——

(お茶の水女子大学幼保プロジェクト)

注

- 1 保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み」については、『幼児の教育』第一〇九巻第二号および第二三号を参照されたい。
- 2 幼保プロジェクトのメンバー五名とは、浜口順子・柴坂寿子・佐治由美子・菊地知子・塩崎美穂である。

〔お詫びと訂正〕

本誌二月号および三月号に、表記の誤りがありました。お詫びして訂正いたします。

二月号 　p. 58 一〇〇八→一〇〇九

p. 59 佐藤キミオ→佐藤キミ男
板野正儀→板野昌儀

三月号 　p. 58 一〇〇八→一〇〇九